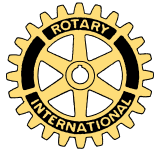


THE ROTARY CLUB OF KARIYA



Weekly



2025～2026年度 国際ロータリー フランチェスコ・アレツォ 会長テーマ

UNITE FOR GOOD よいことのために手を取りあおう

創立 1954年3月8日
承認 1954年3月30日例会日時 毎週月曜日
12:30～13:30
例会場 刈谷市新栄町3の26
刈谷商工会議所内
事務所 TEL (0566)22-2111
FAX (0566)25-2111
メール kariyarc@katch.ne.jp
ホームページ http://www.kariya-rotary.com
会長 近藤 純子
幹事 加藤 大志朗
会報委員長 杉浦 守康

この会報は、地球環境保全に考慮し再生紙を使用しています。

第3300回例会プログラム

[当年度=20回目；当月=4週目]

2026年（令和8年）1月26日(月)

1. 例会……………〈司会：プログラム委員会〉

- 12:00 〈食事〉
12:28 1. チャイム
12:30 2. 点鐘……〈会長〉
3. 開会宣言
4. ロータリーソング斉唱……日も風も星も
5. 講師・ゲスト並びにビジター紹介
6. 会長挨拶並びに会長報告
7. 幹事報告
8. 出席報告
9. 委員会報告
10. ニコニコボックス報告
11. 次週並びに次々週のプログラムの予告
(2/2) ……
卓話 「金継ぎ」
講師 サラーム釉花
主宰 加藤利恵子 様
(紹介者 新美 大輔 会員)
(2/9) ……
クラブフォーラム (国際奉仕委員会)
卓話 「国際交流協会の活動報告および
外国人の状況」
講師 刈谷市国際交流協会
常務理事兼事務局長
斉藤 公人 様
(紹介者 神谷 強 会員)

2. クラブフォーラム……………〈研修情報委員会〉

- 13:00 卓話 「カーボンニュートラルの実現に貢献
する長寿命・高耐熱リチウムイオン
キャパシタ Libuddy の開発」
講師 株式会社ジェイテクト
イノベーション本部
安藤 淳二 様
(紹介者 丹羽 克誌 会員)

12. 謝辞
13. 点鐘……〈会長〉
14. 閉会宣言
13:30 15. 散会

出席

会員総数 94名 出席免除 21名
出席義務者+免除者の内例会出席者 86名
欠席 11名 出席率 87.21%
前々回 (1/14) の修正出席率 100%

会長報告

- 1) 米山記念奨学会より米山功労者へ感謝状がそれぞれ届いております。



第23回 嶋津 孝久 会員
第13回 加藤 英樹 会員
第5回 吉原 孝彦 会員



第3回 盛田 豊一 会員
第3回 加藤 哲也 会員
第3回 野村紀代彦 会員
第3回 伊藤 節夫 会員



第2回 出口 達也 会員
第2回 兵藤 文男 会員
第2回 近藤 純子 会員
第2回 加藤大志朗 会員
第1回 黒田 栄一 会員

会長あいさつ

近藤 純子



こんにちは。今日はお時間に少し余裕があるとのことですので、珈琲の歴史について、少しお話しさせて頂こうと思います。

うちの会社は、かれこれ40年以上にわたり、さまざまなコーヒーの焙煎メーカーさんの工場や脱臭装置や焙煎機、プラントづくりに関わらせて頂いております。とはいえ、私自身が珈琲に詳しいというわけではありません。私たちが普段何気なく飲んでいる一杯のコーヒーの向こう側に、どのような歴史があり、どこでどのように育てられてきたのか。今回は特に、その起源や産地について、少し探ってみました。

まず、コーヒーの始まりとしてよく知られているのが、『カルディの伝説』です。「舞台はアフリカのエチオピア高原。山羊飼いのカルディが、赤い実を食べた山羊たちが夜になっても元気に跳ね回っていることに気づきます。不思議に思い、その実を修道士に渡したところ、煮出して飲むと眠気が覚め、長い祈りの時間を乗り切ることができた」というお話です。

この話が実際にあった出来事かどうかは分かっていませんが、コーヒーが古くから「人を目覚めさせ、集中させる飲み物」として受け止められてきたことを、分かりやすく伝えてくれる伝説だと思います。

やがてコーヒーは紅海を渡り、イエメンへと伝わります。15世紀頃、イスラム世界では、修行や礼拝の際に眠気を払うための飲み物として、大切にされるようになりました。残されている記録を見ると、このイエメンで、コーヒーが計画的に育てられ、飲まれるようになったことが確認されています。

当時、イエメンのモカ港からコーヒーが海外へ運ばれたことから、「モカ」という名前が広まりました。

今でも「モカ系」と呼ばれる、香りが華やかで少し酸

味のある味わいは、イエメンから広まったコーヒーの特徴に由来すると言われています。

当時のコーヒーは非常に貴重で、栽培できる地域もしばらくの間はほぼイエメンに限られていました。そのため、コーヒーは国にとって重要な財産とされていました。

しかし17世紀になると、ヨーロッパの国々がこの飲み物に注目するようになります。

オランダはコーヒーの苗を持ち出し、インドネシアのジャワ島で栽培に成功しました。当時のジャワのコーヒーは、しっかりとしたコクと苦味が特徴で、「ジャワ」という言葉が、やがてコーヒーそのものを指す言葉として使われるようになります。

次にフランスは、カリブ海のマルティニーク島へコーヒーを持ち込みました。そこから中南米へと広がり、最終的にブラジルへ伝わります。

ブラジルは、広い土地と安定した気候に恵まれ、世界最大のコーヒー生産国となりました。香ばしく、味のバランスが良いことから、今でも多くのブレンドの土台を支えています。

一方で、アフリカの産地には、コーヒーの原点らしい個性が残っています。現在では、エチオピアのコーヒーは花や柑橘を思わせる香り、ケニアのコーヒーは、はっきりとした酸味と果実のような味わいで知られています。

中南米に目を向けますと、コロンビアは酸味とコクのバランスが良く、多くの人に親しまれる味として知られています。また、グアテマラは火山性の土壌による力強さと、チョコレートと思わせるようなコクが特徴です。

また、私たちが普段飲んでいる珈琲の多くは、「アラビカ種」と「ロブスタ種」という二つの品種から作られています。

アラビカ種は、香りが高く、酸味が豊かで、味わいに奥行きがあります。世界の珈琲生産量の約6割を占め、高品質な珈琲の中心となっています。私たちが銘柄名で親しんでいるコーヒーの多くは、このアラビカ種になります。

一方、ロブスタ種は苦味が強く、カフェイン量が多いのが特徴です。エスプレッソやインスタントコーヒーに使われることが多く、コクを支える役割を果たしています。

ちなみに、現在、ブラジルに次いで世界第2位のコーヒー豆生産国であるベトナムは、19世紀後半、フランス統治時代にコーヒー栽培が持ち込まれました。その後、1980年代の経済改革をきっかけに生産が急拡大し、現在ではロブスタ種の世界最大の生産国となっています。

コーヒーの味は、標高や気候、土壌といった自然条件に加えて、人の手が深く関わっています。たとえば、実が赤く熟したものだけを見極めて、一粒ずつ手で収穫するのか。それとも、熟し具合に関係なく、枝ごとまとめて収穫するのか。また、収穫した実の果肉を取り除いてから乾燥させるのか、果肉を付けたまま乾燥させるのか。さらに、焙煎を浅めにするのか、深くするのか——こう

した一つひとつの工程が、人の判断によって行われてきました。

同じ土地で育ったコーヒーであっても、人の関わり方によって、香りや酸味、コクは大きく変わります。一杯のコーヒーの味は、自然と人とのコラボレーションによって生まれていると言えるでしょう。

コーヒーの歴史をたどっていくと、その広がり方が、時代や社会のあり方と深く結びついてきたことも見えてきます。また機会があれば、コーヒーがどのように世界へ広がり、人々の暮らしや文化の中に根づいていったのか、そして日本ではどのように親しまれてきたのかについても、お話しできればと思います。

今日、私たちは世界中のコーヒーを当たり前のように楽しんでいます。その一杯がどこから来て、どんな道をたどってきたのかを、ほんの少し想像してみるだけで、コーヒーは、より味わい深い一杯になるのではないのでしょうか。

最後に、今日お話しした内容は、旦部幸博さんの著書『珈琲の世界史』を参考にさせて頂きました。一杯のコーヒーの背景を、より深く知ることができる一冊です。ご興味を持たれた方は、ぜひ手に取ってみてください。

クラブフォーラム

卓話「カーボンニュートラルの実現に 貢献する長寿命・高耐熱リチウム イオンキャパシタ Libuddy の開発」

講師 株式会社ジェイテクト
イノベーション本部
安藤 淳二 様



本講演は、株式会社ジェイテクトが、「ソリューションプロバイダー」への変革を進める中で、カーボンニュートラル実現に貢献する長寿命・高耐熱リチウムイオンキャパシタ Libuddy® の価値と開発背景を紹介する内容である。

自動車産業を中心に、社会全体で脱炭素化が求められる中、電動化に不可欠な蓄電デバイスには「高出力」「高耐熱」「長寿命」の両立が求められている。特に大型モビリティや車載バックアップ電源では、瞬発力と耐環境性が重要であり、従来のリチウムイオン電池やEDLC（電気二重層キャパシター）では限界があった。

Libuddy® は、85℃対応の高耐熱性、低温特性向上（-40℃）、超長寿命、大電流対応を実現し、世界初の耐熱性能を持つリチウムイオンキャパシタとして、車室内電源や工場設備、再エネシステム等で小型化・軽量化・メンテナンスフリー化に貢献できる点が特徴である。

また、ジェイテクトが長年培ってきたステアリング・工作機械・軸受・駆動系のコアコンピタンスを掛け合わ

せ生まれた技術であり、顧客との共創によるソリューションビジネスへの転換を象徴する取り組みと位置付けられる。

具体的な実用化事例も進んでおり、自動車のステアリングホイールとタイヤを電気信号で接続してタイヤ角を制御するステア・バイ・ワイヤ（SbW）用バックアップ電源や、太陽光発電等の再生可能エネルギーの発電効率向上に貢献しており、未来のモビリティ社会やカーボンニュートラルの実現に向けた価値創出を加速している。

第 8 回 理事会

- I 会長挨拶 〈会 長〉
- II 議 題
 - 1. 2月・3月のプログラム（案）について 〈クラブ奉仕委員長〉
〈プログラム委員長〉
 - 2. 花見家族例会について 〈クラブ奉仕委員長〉
〈親睦活動委員長〉
 - 3. 職場例会について 〈職業奉仕委員長〉
 - 4. 職業表彰について 〈職業奉仕委員長〉
 - 5. 第21回刈谷音楽祭後援名義使用について 〈社会奉仕委員長〉
 - 6. 第14回西三河フォークジャンボリー後援名義使用について 〈社会奉仕委員長〉
 - 7. 第7回 SUHARA MUSIC FES 協賛について 〈社会奉仕委員長〉
 - 8. RYLA セミナー中止について 〈青少年奉仕委員長〉
 - 9. その他
- III 会場監督の所見